

ます。また、総合科学部の情報行動科学コースが、今後どのように発展し、展開していくかは、学生諸君の意志にもよると思います。

### 環境科学コースの基礎を固める数理科学と物質科学

**司会** 次は、総合科学部の3分の1の人員を擁する環境科学コースは非常に幅広いわけですので、一応、「基礎科学研究」と「自然環境研究」に分けて、まず「基礎科学研究」についてお話し頂きたいと思えます。

**岡本** 環境科学コースには、「基礎科学研究」と「自然環境研究」の2つがありますが、最初に「基礎科学研究」について話しを行いたいと思えます。基礎科学では2つの大きな目標を掲げています。一つは、数理科学を主とするものと、もう一つは、物質科学を主とするものに分れています。構成人員は主として従来の数学系、物理系、化学系に属していた人たちですが、近年、それぞれの専門分野の研究が多様化し、深化すると同時に既存の学問体系の枠を越えた個別的分野にとらわれない学際的、総合的視野が要請されるようになって来ていますが、本コースではこれを目標とするものですが、学際的、総合的な学問を進める上には、従来の個別の学問が十分理解されていなければなりません。その上にたって初めて学際的、総合的な学問が出来るわけであり、ところが自然科学系においてそれを全て総合するという事はなかなか困難な問題であって、学部生の間は、学際的な学問が出来るような基礎的な能力を養うことが一番大切だと思えます。そのためには今までの理学部の制度の様なやり方ではなく、このコースに入った学生諸君は、理学部で教育される学問をマスターした上で、それを更に学際的に応用していかなければなりません。



幅広い学問が要求され、従って将来進むべき道において、何が専門であるか最初はわからないかもしれないが、そういうところを十分理解した上で自分の専門性をマスターして行かなければならないと思えます。これが現在の社会が非常に大きく要求しているところであります。そういった事で数理科学講座は主として、従来の物理系と数学系との間の学際領域的な事を主として研究し、物質科学では従来の物理学と化学を基礎として、新しい物質の開発、環境を清浄するための物質の開発、また、新エネルギーの開発等を目標にしています。しかし、これはあくまでもマスターコースを希望して入って来る時にこういう方面に進むことが出来る訳で、学部の間ではこういう事を目標とした学問を行うことが望ましいと思えます。こういった幅広く基礎的学問を勉強するため、時には学問的について行けなくなって、ギブアップしたりすることがあるようです。よってこのコースに入った学生諸君は他の学部に入った学生より倍以上の勉強をして行かなければならないことを自覚してほしいと思えます。

### 環境科学コースにおける自然環境研究

**司会** 自然環境研究コースについてお願いいたします。

**倉石** 現在の地球を考えてみますと、人口がどんどん増えていっております。人口が増えれば当然それだけの人を養うための食糧がなくてはなりませんし、また食糧を作るべき土地も次第に不足してまいります。さらに、人類が満足に生活するためには色々な資源が必要ですが、そうした資源が不足してくることも知られています。現在40億位ある地球の人口もすさまじい勢いで増加し、間もなく百億に達しようとしています。そういった事を考えますと、どのようにうまくこの地球をマネージして行くかという事が我々にとってどうしても欠かせない大事な問題です。

“自然”を考える上で、自然保護という大きな問題があります。今、我々が見ている美しい自然をいつまでも子孫に伝えたいということを望まない人はいないでしょう。ところが、一方世の中の変化というもの、特に人口増がもたらす様々な事柄はどんどん“自然”というものを消滅さす方向に進んでいます。そうした時に我々はいったいどのように自然と対処して行くか、ということを考えながら研究をして行

くのが我々の自然環境研究講座の目的です。というのは、ただ単に自然を保護するだけでは増加する人口増をうまく消化する訳には行きません。その上、今までのように、ただ単に野放しに社会を進歩させますと、当然その報いとして、非常にゆがんだ形の世の中ができあがってしまいます。例えば、ある場所に資源が集りすぎたり、ある地域では資源が非常に不足するということがあります。そこで我々は総合的にどのように自然を開発し、自然をどのように有効に利用していき、地球上の我々人類を平和な環境の下で、皆がどうすれば仲よく生活して行けるかといったことを中心にして、研究をして行くことがこの講座の目的です。

こういった目的というのは、単に今まであった様々な自然科学の手段の一つだけ使うというものではありません。今までのお話しにもありましたように、総合的な感覚で研究を押し進めて行かなければなりません。実際我々の教育スタッフも非常にバリエーションに富んだ人達が集まり、総合的に研究を行っている訳です。例えば、生物なら生物というものを念頭に置いて仕事をしているといっても、その生物現象は物理的な、あるいは化学的な諸現象とどのような関連があるかを考えなくてはなりません。また、自然環境を考える上で、いわゆる大地の問題というものが重要ですし、又、地理学というものも非常に重要になってまいります。そうしたものをすべて総合して、とら得ることが一番大切なことだと思います。

私は色々な学生達と接触していて、色々質問を受けます。例えば、「総合科学部は非常に広いので、どのように勉強したらよいか全くわかりません」という質問があった場合は、私は「何か基礎的なものなるべく薄い本を一冊だけ持って来て、その薄い本を徹底的に勉強しなさいと言います。さらにまた、一年間勉強したあとで少なくともこれだけはマスターしましたと言えるものを持つことです。一年一年をこのように過して行きますと、本当に充実した大学生活が過せるわけです。一年たった時に、この一年間色々な事をやったが口では言えないなどということではなく、一年間にこれだけの事をやりました、そしてまたその次の一年にはそれをさらに拡大したり、横につながったりして、どんどん広げて行く形で勉強していくとよいでしょう」と言うような事を私はいつも申しますが、このように次第次第に総合的に物を見ることの出来る学生に育ててほしい

と思います。

## 外国語学講座の言語文化的アプローチ

**司会** ありがとうございました。それでは本学部のねらいの中では、語学力をつけることが一本柱となっていると思いますが、次に、語学講座についてお願いします。

**坂本** 私達の外国語諸講座については、通称「共通講座」と言われ、所属学生はいないのですが、構成は次のような諸外国語から成っています。英語・ドイツ語・フランス語・中国語・ロシア語の五講座で、多数の専任教官がいらっシャいます。その他に朝鮮語、スペイン語、古典語の授業がおこなわれています。

五講座を構成している教官を考えてみますと、もちろん文学、語学の専門家が多くののですが、それと同じくして、宗教学、民族学というような、おそらく他の大学では外国語の教官に成りにくいだろうと思われる方々が特に語学に堪能であり、そういう方々を含めて成りたっています。そして、外国語に強い学部を創るということで、研究面からみて従来のように例えば、英文学、独文学、英語学だけではなく、やはり言語文化というような広やかな視点からも、新しい問題を解明、研究してゆこうとして研究・教育の両面でそのような動きがあります。また、一般教育と専門教育を行うというのが総合科学部の建前ですから、もちろん一般教育につきましては、さっき申しましたように英語・ドイツ語・フランス語・中国語・ロシア語などを分担していますが、同時に特に地域研究の各講座でその層を厚くすることで、例えば、アジア研究、英米研究、比較文化研究、ヨーロッパ研究といった研究集団に参加して実績を挙げて来たとは私は理解しています。特に国際性という面から言って、この学部の語学の特徴としましては、ネイティブ・スピーカーを多数擁しているという形があり、専任はいまのところ英語講座に一人ですが、非常勤の先生としては、アメリカ人の方が四人来ていらっシャって、それからドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語それぞれネイティブ・スピーカーが一般教育を含めて授業を担当されています。そういった面でもしも学生諸君に意欲があるならば原則的には制約がありますが、自由に先程の先生方に教えを受けられ、自主的な意志さえあれば十分に目的が達せられる学部です。そういうプロ

グラムが組んであります。大いにこちらの方でも学生諸君の活躍を期待したいと思います。

先程、文学部と総合科学部生の比較がありました。各外国語講座の先生方にお話しを伺ってみますと、せっかく体制を創ってあるのに総合科学部生は逃げていく傾向があるのではないかという指摘がありました。

### 総合科学部の特性を生かす勉強とは？

**司会** だいたい以上で各コース・講座の特性を色々お話し頂いた訳ですが、要するに入ってきた学生達は、幅広い人間性と創造性と総合性をもった学生として育てていくためには、やはり積極的に問題意識をもって、方向づけをはっきりさせていかなければならないと思います。だが、一面、今日の社会は情報過多気味でもありますし、また、今の学生達は特に目移りが激しくて、なかなか将来の方向づけがむずかしいのではなからうかとも考えられます。現状で、我々の持っているこの陣容とか設備で、学生達がどのような点に気をつけて勉強すれば、総合科学部のこの今のすばらしい特性というものを生かして行けるか、その点について、色々他学部との比較なり、国際的な視点なり、卒業後の就職状況、進学状況などを含めてお話し頂きたいと思います。

**式部** 総合科学部の学生には、ある形のとまどいといったものがあるかと思えます。それは、一つには間口が非常に広いということです。そこからくるとまどいがある。非常にフロントが広いということです。どこから入ったらよいか、また入ってからどう進めばよいか不安がある。もちろん、カリキュラムがあるので、それに乗ってしまえばある程度ルート化されていくわけですが、それにしても学生は二年生までは専攻を決めなくてよいということもあって、それまで何となく中途半端に過すのではないか。山を登るといふ姿勢を持たなければならないところを、登山口のあたりでうろろうする。入学の時点で専攻を決めなくてもよいというのは、学部の特徴であり、入学してくる学生にもそれがアピールしている面が多分にあるようですが、それがマイナスに作用している面がある。入学時に専攻についてオープンだということは、一年生に入った時から自分の志望方向を見定めようと努力しなくてもよいと言う意味ではない。決めるのは一年後でも、しかし、用意としては入る時点から方向性がほしい、と私は思います。

地域文化、社会文化、情報行動科学、環境科学といった諸分野のなかでどこに重点を置くのかは、入学する前から方針をもち、その上でいろいろと試みをもってほしい。そして、その方向性を持ったところの上に立ってコースを決定する。方向性なしでとにかく一年を過ごして、一年が終わった時点で決めるのでは、それは遅過ぎるのです。四年間の学部課程は決して長いものではない。まして、学際的な研究のための用意となると、それだけの努力が必要になる。早いスタートが必要になる。例えば、地域研究をするにはある特定地域の語学を一年の終りまでにはある程度読めるようにならなければならず、それが出来なければそこで落伍する。だから、コース決定がオープンであるということ、自分の方向を決めようとする姿勢を出すということとは、矛盾することではないのですから、積極的に自分の志望を生かすよう努めてほしいと思います。

次に、総合とよく言うけど、どうすれば総合出来るかとよく質問を受けるということですが、これは、先生方のお話の中にも答えがありましたので、ここでは省略させていただきます。

**志村** やはり一年間のモラトリアムの期間の学習というものがひとつの決め手になると思います。総合科学部の教育体制というのは理想的に出来ている。ただし、それは、一般教育との一貫性が学習においてうまく生かされている場合、また、自由度の高いカリキュラム体系の中で筋道だった履修科目の選択ができている場合である。だが、現実にはそれらがどうも不十分らしいということで、社会文化コースでは一年の後期に社会文化ゼミナールを試験的に設けてみた訳ですが、出来れば2つぐらいのものを出すということでもまとめられればと思いましたが、無理な点もあり3つぐらい用意し、そういう形で一年の後期から専門課程の方からも、先ほど問題になったようなことに対する対処の方法も考えています。もうひとつは、特に社会分野の場合、応用的、学際的な分野の専門科目があって、総合的なものが要求される訳ですが、そういったものと学問を体系的に積み重ねて行くうえでの問題があると思います。その点については、履修方法の選択についてガイドラインを作ってやるべきではないかと思えます。

**司会** その選択をする場合に問題意識を持っていることも大切であるけれども、しかし、学生達の試行錯誤の倒立をなるべく少なくしてやる暖かい配慮をすることも大切だと思います。そういった点を含めな

がらどしどし発言して頂きたいと思います。

**倉石** 問題はいかに総合的、学際的であるかという点で、私など自然科学の分野の人間が考えますのに、柔軟性のある人間を自然科学が要求しているということにあるように思います。しかし、そうかといって自分の専門性を失ってはいけないこともまた大切なことなのですが。

**鈴木** 今年、アジアを卒業して、外交官試験に受かり、今外務省の研修所に行っている人がいますが、先日あいさつに来て、自己反省をしているんですが、そのひとつは自分をどう方向に伸ばしたらよいのかという方向づけに踏み切る時期が遅かったということ、もうひとつは、総合科学部というのは、何でも出来るという夢がある、そのためにどうしても選択の時期を伸ばしてしまう。したがって後輩諸君に言いたいことは、自分をどういった方向に伸ばしたいかという夢はそれぞれ持っているでしょうが、同時に選択の時期を早くすること、これだけはぜひ伝えたいと言っておりました。



**坂本** 学生の主体性についていえば、学生が甘やかされてきている面があるのではないかと、言うのも他の学部と較べて学生数とそれを指導する教官の数が非常にアンバランスで、学生に対して多数の教官が係わりあって、手とり足とりといかないまでもそういった面はないか、という話があります。

**武部** 状況としてはそういう面もあると思いますね。適当な競争社会でないと、人間が育たないところがありますから。ユニットの大きいコースではある程度よいのですが、非常に小型のところでは、学生が少なすぎてということもあるでしょう。それなりの工夫の必要などころですね。

**倉石** いろいろな先生から指導を受けるということ、これは非常に良い点ですが、その指導を受ける前に何かひとつのものを持っていますと、いろいろ指導を受ける上で非常に便利です。

文科系の場合にはよくわかりませんが、理科系の場合、算術の勉強をするために九九が必要であるというのと同じように、基本的な何かを勉強していなければいけません。あることを完全にマスターした上で、今度は色々な先生に習うと大変習いやすいのです。例えば、総合性というのは均等に両方を勉強し、普通の人の二倍強勉強しなければならないということではなく、あることを勉強した上でその他のものを理解するというので、このような方法で新しいものを創造することが可能なのです。極端な例かもしれませんが、毎日毎日の新聞を欠さずに読むようにする。新聞を毎日読みながら、自分の専門を勉強して行くとかかなり違いがあると思います。このような方向で勉強しますと、自然科学の勉強をしても社会科学との関連を持つことができます。このように広さというものを総合科学部は要求して行きますし、それをまた上手に指導して下さる先生が非常に多いと言う事が私達の学部の特徴だと思います。**坂本** 個性の強い先生方、それに対し非常に個性の強い学生が出てきて、この両者がぶつかり合っている間に自分の進む道に合った先生が、それも1人ではなく複数の先生に会えるという幸福な可能性を感じます。

#### 志望コース・進路決定のためのアドバイス

**重中** 学生諸君は、自分自身についての今後の目標をできるだけ早い時期に定めなければならないことを実はよく知っている訳です。そのために、いろいろと準備しなければなりませんので、例えば、我々が旅行する場合でも、目的地が決まれば、そこに至るまでの交通の便などの関連するいろいろなことを調べる訳です。山に登る場合でも同じことがいえます。何をやるにしても、あらかじめ予備知識が必要だということは、若い学生諸君もよく知っている訳です。情報行動科学コースの2年次生諸君も、もう直ちに群を決めなければなりません、すでに自分達でいろいろな先生方の所に行って、実際に自分がどのような勉強をしたらよいとか、あるいはどのような事をやりたいとか、について具体的な相談を始めています。私は、「それは非常に良いことだからどンドンやりなさい」とか、自分の目標を定めている学生であれば、「今度は、1人の先生だけでなく、積極的にそれに関連する先生の指導を受けなさい」とか言っています。それでどうにかうまく行っ

ているように思います。先程の社会文化のカリキュラムについての志村先生のお話ですが、1年次生の段階で情報行動科学コースの授業科目を少し入れたらどうかと何度か議論されましたが、それはどうも無理のようです。その大きな理由は、やはり、1年次生の後期の段階でコースを決定するということにあると思います。しかしながら、実際には、学生諸君は1年次生の早い段階でどのコースに進むかをおぼろげながらも決めている状態のようです。従って、専門の授業科目を1年次生の後期におろすということは困難でも、早い時期にある程度の方向づけは必要ではないかということで、学生便覧にも掲載されている訳です。

**式部** 教官側の対応が学生の实情に即していくことが必要なんでしょうね。一年が終わってから専門を決めるという制度そのものに手をつけるのではなく、適切な指導をしていくということです。あくまでも主体は学生にあるのですが、この幅広い総合科学部のなかで迷い子にならないように、四年間という限られた期間を有効に位置づけるにはどう指導していくかということです。その場合、我々が出しているカリキュラムというのは標準カリキュラムであって、学生個々のバラエティーはアドバイザーというか、コース主任というか、そういうところで相談をうけながら、学生の主体性を生かしていく。そういうアドバイザーシステムというのが大切だと思います。学生一人一人はそれぞれ違うものを持っている。その一人一人の違いを受け入れる用意が我々の勤めだと思います。もちろん学部全体は大きいシステムですから時間割、教室の制約というものがある。だが、出来るだけそのなかで学生の生きた要求を生かして行きたい。ただ、道具的な学科というものがある。数学とか語学とか、これはいやおうなしに一年生の時からやっていかなければ、後からでは間に合わないところがある。そういうところは、今の若い諸君にはそれにむかない面があるとも思いますが、きちんとやっていく必要があるでしょう。

**志村** アドバイザー的なものがうまく機能していないケースを時折り見かけます。それは基本的にはアドバイスを受ける学生の主体性の問題でしょうが、そこまで(個人的なバラエティーへの対応を)コース主任に求めるのは無理だと思う。アドバイザーシステムになお考慮する余地があるように思う。

**重中** 実際に積極的に教官室に来てくれる学生諸君については安心ですが、逆に来てくれない学生の方

が心配です。やはり問題点はそこにもあると思います。

**鈴木** 学問にも飛び込みやすい学問と飛び込みにくい学問があると思います。そういう時のアドバイザーがたしかに必要だと思いますね。

**坂本** 外国語の運用についてですが、国際性といっても従来は諸外国の知識を取り入れるということだったと思いますが、すでに日本人の研究ではそういう受身の状態をかなり脱しているのだと思います。現在では自らの研究を表現していくという積極性が求められていると思います。私達外国語の教官もそういった考え方で役に立つようにと語学教育に努力をしてきましたが、聞くところでは、地域文化コースでは卒業論文をドイツ語、英語などで書かなくてもよいというプランがあり、私たちの語学教育がこういった形で生かされていくのかと一寸疑問に思いました。

**式部** 地域では英語を主にするところは英語で書いていませんか。

**坂本** 卒論の本文は日本語でよく、数頁のレジュメを英語で書けばよいと聞きましたか？

**式部** そうですか。英語の場合は英語で、ドイツ語、フランス語の場合はそこまで行かないと思いますが。

**坂本** 理系の場合でも、研究の国際化に備える必要があるといえるのではないのでしょうか。

### 東広島市移転への夢

**司会** 高等学校では、ホームルームなどが一週間に一度は必ずある訳で、いろいろ手とり足とり、過保護なまで面倒をみてもらっていただけて、大学に入って来た途端にただ掲示板をながめるだけで放っておかれると、学生は高校と大学間の落差が非常に大きいと感じる訳です。そういった面で、今後いろいろご指導していただかなければならない点が多く、もっときこまかに論じていただきたいと思いますが、時間もおしせまっていますので、このあたりで、この学年が59年3月に総合科学部が移転しますとすれば、実質的には第四年次に東広島に移転することになる訳です。予定はあくまで予定で、いつ変更になるかわかりませんが、ともかく、そうなると、この学年は総合科学部の中の一翼になった、先駆グループになるだろうと思います。

その点、東広島移転にあたり、総合科学部の特性を生かすためには、どういったヴィジョンをもった